

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：32683

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K13397

研究課題名(和文)活字化された日記資料群の総合と分析に基づく近代日本の「日記文化」の実態解明

研究課題名(英文)Advanced Research on "Diary Culture" in Modern Japan based on the Collection and Analysis of Published Diaries of People

研究代表者

田中 祐介(Tanaka, Yusuke)

明治学院大学・教養教育センター・講師

研究者番号：40723135

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：1) 日記は誰にも知られた、馴染み深い媒体であるが、歴史的、文化的な考察はまだ端緒についたばかりである。本事業では、学際的な体制での定期的な研究会活動、総括としてのシンポジウム開催、研究成果の出版により、近代日本の「日記文化」の実態の一端を明らかにした。

2) 明治以降、膨大な数の日記資料が出版されてきたが、その全容把握はなされていない。本事業では、調査可能な数千冊の日記資料を対象に、基礎的情報のデータ化を図り、850件の検索型データベース(1版)としてオンライン公開(diaryculture.com)した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、身近だったからこそこれまで学術的検討が不十分であった、近代日本の「日記文化」の一端を明らかにした。その成果は、延いては近代日本の歴史を書記文化史の観点から問い直す意義がある。また、「自己をつづる」という営みの制度的確立と日常実践の検証により、私小説研究の研究蓄積を踏まえながら、広く近代日本における「自己語り」の構造と歴史を検討する基盤を整え、今後の研究に開く意義がある。

加えて本研究で構築し、一般公開した「データベース 近代日本の日記」(1版)は、多分野の調査研究に有益な検索環境を提供するとともに、複数の日記の共時的読解への道を開く研究的、社会的意義をもつ。

研究成果の概要(英文)：1) While writing diary has long been a familiar practice in Japan, academic consideration on its culture and history has only just begun. This project achieved to reveal some of the main aspects of "diary culture" in modern Japan through interdisciplinary research and discussion.

2) Since the Meiji era, a huge number of diary have been published, but the whole picture has not been grasped. In this project, I made a database of 850 published diaries in modern Japan (1 version) and set it online at diaryculture.com

研究分野：近代日本文学、書記文化史

キーワード：日記 戦争の記憶と継承 読書文化 書記文化 リテラシー 自己表象 自己語り アーカイブズ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究の学術的背景

背景 1) 近年、「書き続ける行為」としての日記に着目する研究が基礎的な成果を収めている。西川祐子『日記をつづるということ』(吉川弘文館、2009)は日記を「国民教育装置」として位置づけ、日記教育や日記帳の枠組により書き手が如何に規範化され、あるいはそこから逸脱して「社会を支配する言説」から自由な視点を獲得し得たかという枠組を示した。申請者は西川の研究成果を深化すべく、科学研究費補助事業「未活字化の日記資料群からみる近代日本の青年知識層における自己形成の研究」(2014-16年度)の一環として、「近代日本の日記文化と自己表象」と題した研究会を2014年より定期的に開催してきた。文学を中心に幅広い分野の研究者の協力を得て、日記帳の国内外の出版と流通、歴史資料としての可能性を検証する一方、特に日常的に自己を綴る行為としての日記の機能を多角的に検討してきた。これらの活動で培った研究の体制と成果に基づき、近代日本の日記文化の実態解明を学際的に促進できる状況にある。

背景 2) 日記はごく私的で率直な内面吐露の場であるとともに、点検者や読者の眼差しを意識的・無意識的に想定した「自己」の規範化と逸脱の空間でもある。申請者は本事業に先立ち、戦時下の少女や学徒兵の日記を事例として、点検者が赤字により日記の内容に反省を促し、あるいは否定することで書き手の「自己」を規範化する様子を考察した。また、旧制第二高等学校の「忠愛寮」日誌を題材に、紙面に綴られた思索や煩悶に対して追記された他者の批判や炎上の議論の意味を分析してきた。これらの経験を踏まえ、日記における「自己」表出の構造と他者の眼差しの力学を解明することは、近代日本における「自己語り」の構造と系譜を複眼的に理解するために極めて有益であり、文学領域では私小説文学における「自己語り」の研究に新たな光を当てることを確信している。さらにこのような視座からの研究活動は、近年欧米で進展するエゴ・ドキュメント(自己証言文)研究に接続し、国際的な研究体制へと開く可能性をもつ。

背景 3) 近代日本の日記文化の考察を深めるためには、日記資料の総合的な把握と利用環境の整備が不可欠である。これまで数多くの日記資料が出版され、近年はデジタル公開もされてきたが、その蓄積を概観し、学術的な関心から検索・抽出する環境は整えられていない。申請者は故・福田秀一氏(国文学研究資料館名誉教授、国際基督教大学元教授)が蒐集した約3,500点の日記資料群(福田日記資料コレクション)の書目リスト作成を主導し、その中に含まれる明治以降に綴られた計492冊の手書きの日記帳については詳細な目録を制作して学術雑誌に掲載した(「近代日本の日記帳」『アジア文化研究』第39号、2013年3月)。現状では、残る約3,000点の活字化された日記資料(国際基督教大学図書館の倉庫に保管)を管理する立場にあり、2016年3月に実施した資料の概要把握、および試験的なデータベース化作業を経て、学術的利用に適した日記資料データベースを構築する準備が整っている。

2. 研究の目的

目標 1) 教育装置としての日記の文化的・社会的影響を明らかにするとともに、自発的に書き、あるいは強制的に書かされる書記習慣である日記が人々の自己形成に及ぼした影響を解明する。これにより、近代日本の日記文化の実態を解明するとともに、それを日記文学以来の日本文化の伝統としてではなく、明治以降に形成され、展開し、定着した極めて近代的な事象として捉える視座を獲得する。

目標 2) 上記の研究活動を促進するために、既に基礎的な調査を終えた近代日本の日記資料群に基づくデータベースを構築し、インターネット公開により学術的な利用環境を提供する。これにより、近代日本を扱う研究諸領域からの日記資料調査の環境を整備するとともに、一人の書き手の日記を通時的に読む「つづき読み」(通読)に加え、日記の書き手の所感や経験を共時的に検証する「ならべ読み」(併読)を可能にする環境を提供する。

目標 3) 以上の研究成果を文学および隣接分野の研究蓄積に接合しながら、近代日本の書記文化と自己形成の関係をめぐる学際的な研究体制を強化し、欧米で近年進展するエゴ・ドキュメント研究へと開いてゆく。研究の最終年度には近代日本の日記文化をめぐる国際シンポジウムを開催し、その成果を論文集にまとめて公に発信する。

3. 研究の方法

1) 定期的に研究会(「近代日本の日記文化と自己表象」)を開催し、文学を中心とした学際的な研究体制を活用しながら、日記帳の国内外の出版流通、教育的言説やメディア表象の歴史的展開等を分析する。加えて日常的に綴る行為である日記習慣が人々の自己形成にもたらした影響について、個別的な事例の考察を重ね、広い文脈に開いてゆく。

2) 国際基督教大学図書館の倉庫に保管する 福田日記資料コレクション のうち、明治以降に書かれ、活字化された約 3,000 点の日記資料群を対象に、日記の概要、記入者情報、記入した期間と場所、特記事項等を中核としたデータベースを構築する。日記の主題別にデータベース化の区切りを設け、取得済みのウェブドメイン (diaryculture.com) を利用して順次、検索可能な形式でインターネットに公開する。

3) 研究協力者を得て、本研究が扱う近代日本の「書く歴史」の理解を、「読む歴史」との繋がりにおいて深めてゆく。同様に、2014 年度より開催する私小説研究会、近世以前の歴史学者を中心とした「日本人の日記」研究会 (愛知学院大学人間文化研究所プロジェクト) との連携を強める。海外のエゴ・ドキュメント研究者と協力関係を築き、学術交流を図る。

4. 研究成果

(1) 従来研究成果をまとめた研究書を出版した(田中祐介編『日記文化から近代日本を問う』笠間書院、2017 年)。全 7 部、17 章構成であり、総論では近代日本の日記文化を研究する三つの視座として「史料としての日記」「モノとしての日記」「行為としての日記」を提示した。出版後、今回助成事業の研究会およびシンポジウムの主題は、基本的にこの書の問題意識を踏まえた設定となり、研究深化のために資するところは大きかった。

(2) 本事業の活動母体となる研究会「近代日本の日記文化と自己表象」を、2、3 ヶ月に一度の頻度で定期開催し、近代日本の日記文化を多角的、学際的に深めることができた。各回平均して 2 件の研究報告をおこなった。参加者数は毎回約 20 名から 25 名ほどで、研究分野は文学、歴史学、思想史学、教育史学、社会学、文化人類学など多岐にわたる。登壇者も多様であり、第 14 回研究会 (2017 年 12 月 16 日) には、「手帳類」プロジェクトの代表である志良堂正史氏にご講演をいただいた。また、第 19 回研究会 (2018 年 12 月 22 日) には、戦場で餓死した日本兵の日記を主題とした『マーシャル、父の戦場』(みずき書林、2018) の編者であり、映画『タリナイ』の監督である大川史織氏にご講演いただいた。研究会は、助成事業の終了後も、「日記文化」研究を中核としながら、広く「書くことの歴史」を問う場として引き続き定期開催する所存である。

(3) 定期開催する研究会の成果の集大成として、2019 年 9 月 28、29 日の 2 日間にわたり学際シンポジウムを開催し、延べ約 100 名が参加した。研究報告は計 16 本で、両日の冒頭では田中が総論的報告をおこなった。28 日の研究報告終了後には、「女性の日記から学ぶ会」代表である島利栄子氏と、「手帳類」プロジェクト代表である志良堂正史氏の特別対談を設けた。加えて、29 日の午前には、明治学院大学アートホールにて、マーシャル諸島で餓死した日本兵の日記を扱った映画『タリナイ』の特別上映会を開催した。シンポジウム会場では、「女性の日記から学ぶ会」のご協力により、「高度経済成長期の日記」展を開催することができた。同様に、武蔵野美術大学学部生である山田鮎美氏による展示企画「未知の人々の日記を読み、私注をつける」を開催した。シンポジウムの成果は、2020 年度内に論文集として出版する予定である。

(4) 本事業では、近代日本の日記資料を扱うデータベースを制作し、公開した。国際基督教大学図書館に保管する日記資料 (福田秀一氏蒐集) を整理した上で、「戦場」と「銃後」をキーワードとして抽出し、執筆者の氏名と社会的属性、執筆期間、収録書名等を中核に、継続的にデータ化の作業をした。並行して、プログラマーである志良堂正史氏の協力を得て、検索データベースのシステム構築を進めた。これらの成果に基づき、計 850 件を収録する「データベース近代日本の日記」(版) を公開した (2020 年 1 月、<https://diaryculture.com/database/>)。申請者の新規科研費助成事業 (「肉筆および活字資料の包括データベースに基づく近代日本の「日記文化」の発展的研究」、基盤研究 C、2020-2022) において、データベースの拡充に取り組む計画である。

(5) 私小説研究会との連携深化による成果として、同会の成果論文集 (井原あや・梅澤亜由美・大木志門・大原祐治・尾形大・小澤純・河野龍也・小林洋介編『「私」から考える文学史 私小説という視座』勉誠出版、2018 年) に、本事業の成果の一部を寄稿した (「真摯な自己語り」に介入する他者たちの声 第二高等学校『忠愛寮日誌』にみるキリスト教主義学生の『読み書きのモード』)。同書の編者である大木志門氏には、上述のシンポジウムにも登壇いただき、水上勉の小説の「自己語り」に関する研究報告を賜った。こうした成果を踏まえ、同会との協働により、近代日本の文学的言説、および非文学的言説の「自己語り」の横断的考察を深めてゆきたい。

(6) 和田敦彦氏 (早稲田大学教授) が主催する、直木賞作家の榛葉英治の日記の読解プロジェクトに携わり、史料としての可能性を検討した。この成果は萌芽的であり、事業年度内では研究

報告を一度おこなったにとどまる(「逡巡と決心の長期反復から時代を読む 榛葉英治日記からみる戦後小説メディアの変動」第23回「近代日本の日記文化と自己表象」研究会、2019年12月14日)。しかし既に次年度にも研究報告や出版計画を含む予定があり、今後深めて行きたい主題である。

(7) 日記文化研究から近代日本を問い直すためには、国際的な研究体制の構築も不可欠である。本事業では、チェンマイ大学の日本研究連続講義「日記文化から考える近代日本」(2017年8月27日)において、本事業の協力者である大岡響子氏、堤ひろゆき氏とともに大学院生向けの講義をおこない、「書くこと」の文化と歴史をめぐる両国間の比較考察をおこなった。また、全北大学(韓国)で開催された国際シンポジウム「Analysis on Social Change of post-war East Asia through Personal Documents」(2018年1月18、19日)に出席し、本事業の協力者である大岡響子氏、中野綾子氏とともに研究報告を行った。本事業当初の目的として学際性、国際性の充実化を謳い、事業最終年度のシンポジウムでは学際的な研究体制が整ったものの、国際シンポジウムとはならなかった。これは今後の事業で実現すべき課題として、向きあう所存である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田中祐介	4. 巻 96
2. 論文標題 「書くこと」の歴史を問うために 研究視座としての「日記文化」の可能性と学際的・国際的連携	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本近代文学	6. 最初と最後の頁 138-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田中祐介	4. 巻 143
2. 論文標題 【書評】『青森県史 資料編 近現代8 日記』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 弘前大学國史研究	6. 最初と最後の頁 59-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件／うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Yusuke Tanaka
2. 発表標題 Voices of Others Meddling in Naked Self-Expressions: Christian Dormitory Diaries at the Second Higher School in Taisho period
3. 学会等名 22nd annual ASCJ (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中祐介
2. 発表標題 「教養」の理想と呪縛的現実 動詞的用法への再定義か、あるいは訣別のときか
3. 学会等名 第23回旧制高等学校記念館夏期教育セミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hiroyuki Tsutsumi
2. 発表標題 Individualism of Student and the School Identity based on the "School Color": A Case Study of an Old-System Middle School in Nagano Prefecture
3. 学会等名 22nd annual ASCJ (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Robert Ono
2. 発表標題 The Leading Confession: Self-Representation of Leprosy Patients During the 1920s-1930s
3. 学会等名 22nd annual ASCJ (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中祐介
2. 発表標題 研究視座としての「日記文化」の可能性: 「書くこと」の歴史を問うために
3. 学会等名 「近代日本の日記文化と自己表象」第11回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 田中祐介
2. 発表標題 近代日本の 日記文化 とは何か 「書くこと」の歴史を国際比較を見据えながら
3. 学会等名 日本研究連続講義「 日記文化 から考える近代日本」(タイ・チェンマイ大学)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Yusuke Tanaka
2. 発表標題 Diary Culture" as Research Perspective
3. 学会等名 Analysis on Social Change of post-war Ease Asia through Personal Documents
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 田中祐介
2. 発表標題 高度経済成長期の「飯塚とみ日記」(昭和36年～)を読む
3. 学会等名 「女性の日記から学ぶ会」例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yusuke Tanaka
2. 発表標題 Voices of Others Meddling in Naked Self-Expressions: Christian Dormitory Diaries at the Second Higher School in Taisho period
3. 学会等名 Asian Studies Conference Japan 2018
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 田中祐介	4. 発行年 2018年
2. 出版社 真摯な自己語りで紹介する他者たちの声 第二高等学校『忠愛寮日誌』にみるキリスト教主義学生の「読み書きのモード」	5. 総ページ数 480
3. 書名 「私」から考える文学史 私小説という視座	

1. 著者名 田中祐介編	4. 発行年 2017年
2. 出版社 笠間書院	5. 総ページ数 568
3. 書名 日記文化から近代日本を問う	

〔産業財産権〕

〔その他〕

近代日本の日記文化と自己表象 http://diaryculture.com

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----